

対抗文化的連帯にもとづく音楽フェスティバルの再考 ——1977年「ローリング・ココナッツ・レビュー・ジャパン」における国際交流を例に——

大畠 徹

キーワード：対抗文化、フェスティバル、国際交流、捕鯨問題、ウッドストック・ネイション

1 はじめに

本稿は1977年に開催された音楽フェスティバル「ローリング・ココナッツ・レビュー・ジャパン」の成立過程を検証し、対抗文化の連帯意識にもとづくイベントづくりが、特有の国際交流を生み出していたことを論じる。とりわけ運営者たちのネットワーク形成に着目し、その交流が、新しい運動の可能性として経験されていたことを明らかにする。

フォークとロックの歴史において、1960年代アメリカの対抗文化は、きわめて重要な位置を占めている。公民権運動、ベトナム反戦運動の高まりを追い風に、60年代前半に左派の動きが活発化、さらにこれと連動しながら、既存の社会体制に拘束されないオルタナティブな生活圏を模索するヒッピーが擡頭した。前者を牽引したのが、改作した民謡に政治的主張をのせて歌うフォークであり、後者の旗印となったのが、精神解放を爆発的な電気音響で表象するロックだった。

1959年開始のニューポート・フォーク・フェスティバルを皮切りに、1967年モントレー・ポップ・フェスティバル、1969年ウッドストック・フェスティバルによって頂点を迎えた大型の音楽フェスティバルは、反体制、反商業主義、愛と平和を音楽で表現する対抗文化を世界に喧伝した。これらのイベントの成功は、音楽が、なんらかの社会変革をもたらすという期待を若者たちに抱かせた。この対抗文化の世代的共鳴を、アビー・ Hoffman⁽¹⁾は、「ウッドストック・ネイション」と呼称した。

大まかにいえば、従来の対抗文化に関する歴史記述は、文化的な偉業か政治的な失敗かに二分されてきた。すなわち、若者たちの熱量が革命的な音楽の誕生をもたらしたとするロック誕生「神話」と、反体制運動が結局のところそのイメージを商品化しニッチマーケットを生むにすぎなかったとする「ヒップキャピタリズム」論が、微

妙な距離感を保って並行的に語られてきたといえる。⁽²⁾

しかし近年、両者を調停し、対抗文化の社会史的な意義を見直す研究が現れている。たとえば、ベトナム戦間期のサンフランシスコとベトナムで、ロックが担った役割を検証した歴史家のマイケル・J・クレイマーは、対抗文化／ロックは、高度資本主義下の複雑な権力構造において、シチズンシップに接近するための新しい形式として普及したのだと論じている。⁽³⁾ヘイトアシュベリーの表現者にとっても、戦地でレコードに耳を傾けるGIにとっても、あるいは、GIを相手にしたベトナム人ロックバンドにとっても、「ウッドストック・ネイション」は、一つの共同体としてイメージされ、激変する社会のなかで自らが置かれた状況を認識し行動を起こす手がかりになった。その文化的かつ政治的な共感覚が、国や地域を超える連帯意識に拡張したことを、クレイマーは、「ウッドストック・トランスナショナル」と呼んでいる。

ただし、クレイマーがぬかりなく補足するように、「ウッドストック・トランスナショナル」は、純粋な超国家的ユートピアとして現出したわけではない。ロックの世界的普及が、アメリカの政治・経済・文化的覇権と不可分である以上、対抗文化によってもたらされるシチズンシップは、その音楽に共鳴すること自体にともなうアメリカとの不均衡な関係を召喚したからである。⁽⁴⁾対抗文化の連帯が再帰的に国家間の相違を認識させていく。ここにあらわれる国際意識を、クレイマーになぞらえて「ウッドストック・インターナショナル」と呼ぶこともできよう。

本稿は、そのような対抗文化的連帯の問題系から、日本の音楽フェスティバルを再考するものである。近年アカデミズム、ジャーナリズムの別を問わず、日本の「フェス」をめぐる議論が活況だが、1997年開始の「フジ・ロック・フェスティバル」が端緒と位置づけられ、それ以前の大規模音楽イベントは、前史的に処理されるにとどまっ

所属：リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科

ている。例えば社会学者の永井純一は、かつてのフェスティバルが「夢」や「理想」といった〈反現実〉を標榜する物語によって支えられていた」のに対し、現代の「フェス」は構成も参加者の体験も重層化⁽⁵⁾されているとして、「フジロック」端緒説を採用している。

本稿のねらいは、その歴史観に異論を挟むことではない。そうではなく「物語によって支えられた」かつてのフェスティバルが、いかに可能となり、どのような経験を与えていたのかを検証し、フェスティバルの歴史研究に新たな論点を導入することである。

対象とする「ローリング・ココナッツ・レビュー・ジャパン（以下RCR）」は、日本、アメリカ、カナダの有志が運営し、日米のフォーク／ロック系ミュージシャンが無償で参加したベネフィットイベントである。ここではそれを、対抗文化的連帯による国際交流の例として捉え直す。このイベントの成立を可能にしたミュージシャン、音楽事業者、社会運動家らのネットワーク形成を検討し、「ウッドストック・ネイション」という「反現実」がもたらした人的接触の「現実」を浮き彫りにする。

まず二章では、イベントの母体となった70年代後半の環境保護ネットワークを明らかにする。続く三章では、日本メンバーの関わり方を検証し、RCRが新たな文化運動の可能性として経験されていたことを論じる。以上により、ロック誕生神話とヒップキャピタリズム論の狭間に埋没してきた、日本の音楽フェスティバルの再考を試みる。

2 「ポスト60年代」としての反捕鯨運動

RCRは、「The Sea Must Live」をテーマに、1977年4月8日から10日にかけて東京国際見本市会場で開かれた国際型のベネフィット・コンサートである。日本、アメリカ、カナダの有志が主催し、総計30組、80名以上のミュージシャンのほぼ全てが無償で参加した。【資料】にその基礎的なデータをあげておく。

出演者を一瞥してまず驚くのは、無報酬にも関わらず、きわめて多くの外国人ミュージシャンが参加した事実である。簡単にその傾向に触れておくと、フォークリヴァイヴアル運動にゆかりある人物や、「ウエストコーストロック」と呼ばれる西海岸拠点のシンガーソングライターが中心である。三名のウッドストック経験者（ジョン・セバスチャン、リッチー・ヘヴンス、カントリー・ジョー・マクドナルド）、「公民権運動の声」オデッタなど、60年代対抗文化を彷彿とさせるラインナップであ

るのは間違いない。いずれにせよ、フォーク／ロック系の外国ミュージシャンがこれほど多く参加したイベントは、当時においては興行を含めても例がない。

では彼らは一体何を主張するために日本を訪れたのか。公式に掲げられたテーマは「The Sea Must Live」、すなわち海洋環境の保護だった。しかし北米のメンバーにはより明確な目的があった。鯨の保護を捕鯨国日本で呼びかけることである。もともとこのイベントは、カナダの環境保護団体「グリーンピース」が提案した企画で、その趣旨に賛同したミュージシャンが名を連ねたのである。

70年代北米では、環境保護運動の一環として、海洋哺乳類の保護が課題とされていた。北米のメンバーにとってRCRは、反捕鯨で結びついた人脈を結集した大行事だった。本章では、この「鯨の旅楽団」がいかに組織されたのかを明らかにする。

2-1 グリーンピースの活動展開

まず、発端をつくったグリーンピースの活動展開から、反捕鯨運動とフォーク／ロック系ミュージシャンの合流経緯を確認しておこう。

グリーンピースは、現在会員280万人以上、支部数39カ国を数える、世界最大規模の環境保護団体である。海洋、森林、エネルギー等々多岐にわたる問題に取り組んでいるが、もとは核実験反対運動を出発点としていた。1969年、地下核実験「ミルロー」を阻止する目的で発足した「波を立てるな委員会（Don't Make a Wave）」を母体とし、1972年に設立されたのが「グリーンピース財団」である。

この組織を一躍有名にしたのは、奇抜な運動方法であった。核実験施設が設置された離島へ船で接近して監視し、その行動をメディアに報じさせて世論に訴えかけた。この戦術は実質的な効果を上げ、アメリカ原子力委員会は1972年にアムチトカ島での核実験施設の運用停止を決定した。グリーンピースの活動は、ロビイングで行政に働きかける従来の団体とは一線を画しており、新しい環境運動の潮流をもたらした。「シーシェパード」や「アースファースト」ら派生する団体を生み出し、過激な行動も辞さない「ラディカル環境運動」の基礎を築くことになったのである⁽⁶⁾。

環境史家のフランク・ゼルコは、グリーンピースがもたらした環境運動の特徴として、公民権運動を継承した非暴力直接行動の理念、「証人になる（bearing witness）」クエーカー教徒の思想、マーシャル・マクロー

ハンから影響を受けたメディア戦略、生態学的な立場にもとづく国際主義、ファッション等の文化風俗と接合した運動のクール化を挙げ、「対抗文化的環境主義⁽⁷⁾ (countercultural environmentalism)」と呼んでいる。長髪に絞り染めのTシャツというヒッピーさながらの出で立ちで、「国境なき世界」を謳うグリーンピースは、そのライフスタイル、行動、理念、いずれにおいても、60年代対抗文化と連続する存在だった。

「対抗文化的環境主義」を象徴していたのが、フォーク／ロック系ミュージシャンとの共闘である。その最初の例となったのが、監視船購入の資金調達を目的に1970年9月16日、ヴァンクーバーコロシウムで開催したコンサートである。シンガーソングライターのジョニ・ミッチェル、ジェーム・ステイラー、フィル・オークスらが出演し、購入予算を上回る17000ドルの収益を上げる成功を収めたという⁽⁸⁾。以降、グリーンピースはミュージシャンと親交を深めるようになり、音楽を中核的な手段としていく。

1970年代半ば以降のグリーンピースは、反捕鯨を中心的な課題とするようになる。1975年、日本とソ連の捕鯨船をターゲットとして、船と鯨のあいだにボートで割り込み妨害する「プロジェクト・エイハブ」を開始、音楽イベントもたびたび実施し、グレイトフルデッドのジェリー・ガルシアが協力したコンサート（1977）では2万ドルの収益を挙げている。対象を核施設から捕鯨船に変えても、直接行動の理念と戦術は継続されていった。

ではなぜ、新たなテーマが鯨だったのか。団体史は、鯨とのコミュニケーションに成功して啓示を受けた水族館勤務のメンバーによって提案されたと記述している⁽⁹⁾。こうした神秘主義的な語り自体が、初期グリーンピースの特徴そのものといえるが、補足すべきなのは、海洋哺乳類保護は、必ずしも彼ら独自のテーマではなく、既にアメリカの世論を席卷していたことである。ジョン・C・リリーによるイルカの知性研究（1959）、イルカを主人公にしたドラマ「わんぱくフリッパー」の流行（1963）、ロジャー・ペインによる鯨の声のLP化（1970）にみられるように、1960年代以降、イルカと鯨への愛護心は、国民的な感情になっていた⁽¹⁰⁾。

ミュージシャンにも、これに同調するものが少なかった。フォーク界の重鎮ピート・シーガー〈Song of the World's Last Whale〉、ウッドストックの立役者、カントリー・ジョー・マクドナルド〈Save the Whale〉、クロスビー＆ナッシュ〈To The Last Whale〉など、相次いで「反捕鯨ソング」が創作されていた。つまり、1970

年代半ばの段階で、「対抗文化的環境主義」を反捕鯨運動へと展開する下地は整っていたといえる。グリーンピースはそうした流れを受けて「プロジェクト・エイハブ」を実行し、この分野の主導権を握ったのである。

2-2 「ドルフィン・プロジェクト」とマイアミのフォークション

日本でのコンサートは、グリーンピースが1976年に設置した「ジャパンミッション」により提案され、資金面でも運営面でも、この組織が母体となる予定だった。だが間もなくしてジャパンミッション自体が打ち切りとなった。ミッションのリーダー、マーク・ラベルが、グリーンピース本部による日本製商品不買運動の方針に反対し、除名処分となったためである。以降、既に準備に着手していた日米加のメンバーが独自の実行委員会を立ち上げ、取り仕切っていくことになった。

実行委員会は「ドルフィン・プロジェクト・ジャパン・コミティ」と名付けられた。これは、委員会のメンバー、リック・オフエルドマンが運営するイルカ保護団体「ドルフィン・プロジェクト」から取られたものである。

オバリーは、もとは水族館に勤務するイルカ調教師で、60年代に人気ドラマ『わんぱくフリッパー』にも携わった業界の有名人だった。かねてからイルカ産業の残酷さを憂慮していた彼は、自身が調教したイルカ「キャシー」の「（彼が考えるところの）自殺」を契機に運動家へ転身する。1970年、フロリダ州マイアミのココナッツグローブ地区を拠点としてドルフィン・プロジェクトを設立、研究機関や商業施設で飼育されるイルカの「解放」を求める活動を開始した⁽¹¹⁾。

初期のドルフィン・プロジェクトは、少額の会員費と寄付によって運営される私設団体で、慢性的な資金不足を抱えていた。その窮状を救ったのが、親交のあるミュージシャンたちだった。RCRの出演者の中では、ボブ・イングラム、ジョン・セバスチャン、フレッド・ニールは、この団体を支援するチャリティコンサートを実施するなど、親密な関係にあったようである。来日こそ実現しなかったが、その他にもドルフィン・プロジェクトに関与していたジョニ・ミッチェルやクロスビー・ステイルス＆ナッシュらもRCRへの参加の意思を示していた。

ドルフィン・プロジェクトとミュージシャンとの関係で特筆すべきなのは、その背景にあるココナッツグローブの地域性である。この地はもともと「マイアミのグリーンジグヴィレッジ」とも呼ばれ、フォーク運動の盛んな場所だった。海岸に面した温暖な気候、親密な人間関係、

コーヒーハウスに集うくつろいだ雰囲気音楽活動を好んで、移り住むミュージシャンも少なくなかった。オープニングアクトを務めたボブ・イングラムは、地元ミュージシャンのリーダー的存在だった。ジョン・セバスチャンは、地域讃歌的な楽曲を創作するなどこの地に入れこみ、頻繁に出入りしていた。フォークリバイバル運動の重要人物であるフレッド・ニールは、1970年代には音楽活動をセミリタイアして移住し、オバリーの最大の協力者になっていた。ココナッツグローブは海洋哺乳類愛護とフォーク音楽の結節点となっており、そこで築かれた親密な関係が、RCRに結実されていったのである。

2-3 鯨をめぐる「カリフォルニア・コネクション」

RCRの初日は、ドルフィン・プロジェクト絡みの出演者が多数を占め、ニューヨーク、マイアミの人脈に日本の歌手を加えたフォークショウであった。対して翌日以降には、西海岸のミュージシャンが多数出演している。サイケデリックロックからニューエイジまで音楽スタイルとしては幅があるが、カリフォルニアに拠点を置いていたことで共通している。加えて、当時のカリフォルニア州知事ジェリー・ブラウンも来日し、スピーチを行なっている。

二日目に出演したジャクソン・ブラウンらは、通常のロック史の記述では「ウエスト・コースト・ロック」と呼ばれ「内省の時代」の音楽と位置づけられる。ベトナム戦争の挫折やウッドストックの理想を打ち砕く事件・事故の多発によって、ロックの表現内容は、社会変革から私的な生活へと変化した。政治の季節が終わり、自己を内省的に見つめ直す歌手たちが現れた。それがウエスト・コースト・ロックだとされる。

しかし、当時の西海岸の音楽シーンは、厭世ムード一色だったのではない。社会学者のトッド・ギトリンが詳述したように、70年代アメリカの新左翼やヒッピーのネットワークは個別の問題系へと枝分かれた運動を展開し、ミュージシャンもそれに積極的に関わっていた。ジャクソン・ブラウンは、ベネフィットコンサートをライフワークとし、エコロジー運動や反核運動に携わっていた。3日目に出演したカントリー・ジョー・マクドナルドは、ウーマンリブ運動を経てグリーンピースに関わっていた。社会運動は複数化し、そのなかに身を置くミュージシャンも多かったのである。

興味深いのは、そのようなポスト60年代の動きと州行政が連携する関係にあったということである。1975年に史上最年少の34歳で知事に就任したジェリー・ブ

ラウンは、大口の献金を拒否し草の根的に政治資金を調達する新しい世代の政治家だった。禅に精通しロックを好むこの「ヒッピー知事」が公約に掲げ、とりわけ強い関心を抱いていたのが、海洋環境の保護であった。

1976年11月、RCRの前哨戦となるイベントが、サクラメントで開催されている。「鯨に意識をもつこと」を目的としてブラウン知事が主催した「カリフォルニア・セレブレイツ・ザ・ホウエール」である。地元の大学新聞が報じるところによると、壇上には「ホール・アース・カタログ」のスチュアート・ブランド、自然詩人ゲイリー・スナイダーら、ヒッピー文化／エコロジー運動にゆかりある人物が並び、ポール・ウィンター、カントリー・ジョー・マクドナルド、ジョニ・ミッチェル、そしてココナッツ・グローブから訪れた「ローリング・ココナッツ・レビュー」が演奏を披露した。会場は、「サクラメントがこれほどまでに活気に満ちたことはない」熱気に包まれたという⁽¹³⁾。

このイベントが示すように、カリフォルニアにおける鯨の保護は、運動家、ミュージシャン、政治家を取り結ぶテーマとなっていた。もちろん参加者の目的は一つに還元できないが、その理念、手法、人脈において、60年代の延長にある草の根運動の延長にこれが位置づけられていたことは間違いない。

日本でのコンサートは、以上にみたアメリカ両海岸における鯨・イルカ保護運動の人脈を結集させるものだった。ニューヨーク、フロリダ、カリフォルニアの各都市に支部が設置され、ドルフィン・プロジェクトのオバリーとセバスチャン、ジャパン・ミッションのラベル、カリフォルニア・セレブレイツ・ザ・ホウエールのプロデューサーを務めたりオ・マコータ、さらにウッドストック・フェスティバルの主催者として知られるマイケル・ラングらがそれを統率しながら大旅行団の遠征計画が進められた。

3 音楽フェスティバルに浮上した国際関係

3-1 日本支部発足

では、この大きなうねりに、日本側のメンバーはいかに接触していったのか。

日本から実行委員会に加わったのは、レコード店経営者、音楽評論家、レコード会社のスタッフなどの音楽関係事業者である。グリーンピースの要請に応じたのが、東京青山で輸入レコード店を営む岩永正敏であり、彼の人脈を中心に構成されたからである。

その活動については、岩永の自著と『宝島』に寄せた手記に詳しい⁽¹⁴⁾。その記述をもとに、北米の運動に日本メンバーが合流する経緯をまとめておこう。

1976年9月、岩永は、知人の出版者の紹介でグリーンピースのマーク・ラヴェルと面会する。音楽雑誌の創刊に向けて集っていた仲間たちに呼びかけ、協力の要請に応じる。ところがその矢先の10月末、ラヴェルのグリーンピース除名によって計画は白紙に戻り、北米メンバーは、組織を再編すべく一時帰国した。翌月末ラヴェルらが再来日し、12月8日東京で記者会見を開く。岩永、ラヴェルの他に、音楽評論家の浜野サトル、環境学者の宇井純、シンガーソングライターのジョン・セバスチャン、イベンターのマイケル・ラング、リオ・マコータが登場した。この間の10月には、前述のサクラメントでのイベントが開催されており、出演希望者は、当初の予定を大幅に上回っていた。この記者会見以降、東京とアメリカ3都市の4支部体制が敷かれ、大型フェスティバルの実施に向けた準備が本格化した。

前章で見たように、北米の反捕鯨運動は、60年代対抗文化と連続しており、RCRにいたる人脈や組織は、すでに長い時間をかけて築かれていた。一方、日本のメンバーが要請を受け、この運動に関わり始めたのは、イベント開催の6ヶ月前のことだった。

3-2 「ウッドストック・ネイション」の亀裂

岩永によると、当初捕鯨問題への興味は皆無であり、「[捕鯨反対運動]の方はさっぱり知らなくて、関心すら持ったことのないことがら」だった。最初に興味を持ったのは、「好みのミュージシャン達が今度は来日して主張を訴える点」にあった⁽¹⁵⁾。

日本メンバーの多くは、戦後生まれのベビーブーマーで、大学在学中に「ベ平連」に参加していた岩永を始め、「広島フォーク村」の旗揚げを主導した伊藤明夫、日本のロック草創期に立ち会い音楽評論家としてのキャリアを歩んだ浜野サトルなど、60年代後半に市民運動やフォーク／ロックシーンに関与していた。対抗文化の記憶・経験をもつ彼らにとって、このイベントに参加する意義は、鯨保護の主張とは別の次元で了解された。

広報的役割を担ったフォーク・シンガーの泉谷しげるは、記者会見のために来日した米メンバーとの交流の様子を以下のように綴っている。「クジラの肉を食べるのがとても好きだ」とジョン・セバスチャンを挑発すると、笑って返してきたので「ぼくたちは友達になった」。バーに連れて行くとジャム・セッションが始まり、「スタッ

フもお客も50人以上の人々が店内せましと熱気した」。「久しぶりに”ぼくら”というコトバが多くトビかっている。”やってしまおうぜ”これが、僕らの合言葉だ⁽¹⁶⁾」。ここで泉谷が胸を弾ませて語っているのは、音楽が国境を超えた「ぼくら」を形づくる、「ウッドストックネイション」への期待にほかならない。

しかしその連帯は、即座に一枚岩ではなくなった。記者会見以降、リオ・マコータを中心とする米メンバーが実行委員会の主導権を握るようになり、その強引なやりかたに日本側は不満を募らせていったのだ。

まずイベント会場について。岩永とラベルとの会談で、会場は低予算で実施できる大学講堂の利用が決定していた。ところが、12月の来日時、米側が大型フェスティバルへの変更を主張、当時としては日本最大規模の施設である貿易センターを3日間貸し切るように要求してきた。

イベントの大型化により資金調達が最大の問題となった。ここでも食い違いが生じた。米側は、複数の環境保護団体から援助が受けられると主張していた。しかし、最後まで支援者は現れず、資金繰りのために各人が奔走することになった。

出演者調整でもトラブルが頻発した。伝えられていた出演者のキャンセルが開催直前まで相次いだ。そのうえ米側は大物ミュージシャンとの交渉を続けるために、チケット発売の開始を延期させた。日本側が渡米のうえ説得し、リリースにこぎつけたのは、本番まで1ヶ月を切った3月後半だった。

このような齟齬の連続はメンバーに少なからぬ遺恨を残した。浜野サトルがイベント終了後に音楽雑誌で綴った総括は、実行委員会における日米の衝突がいかに深刻なものであったかを顕著に物語っている。

しばらくは「アメリカ」と一定の距離をおいておきたい、という気持ちがあるのなかにはある。本当に「兄弟」と呼べるような少数の人々との出会いがあったとはいえ、ローリング・ココナツの3日間のあいだに、白いアメリカの腐臭をいやというほど嗅いでしまったのが、その原因かもしれない。…「アメリカでの経験こそ、この世で最高に尊ばれるべきであり、きみたちはそれを模範にしなければいけない」といった姿勢が、彼らのうちにはつねにあった。言葉でそう言わずとも、暗黙のうちに彼らはそれを示した⁽¹⁷⁾。

つまり「ウッドストック・ネイション」の連帯は、超国家的ユートピアを実現したわけではなかった。準備過程で日本側は、その内部に露呈する「白いアメリカ」を痛切に認識し、兎にも角にもイベントを成立させるための「外交」に追われていったのである。

3-3 テーマをめぐる交渉、内省、動員

運営だけでなくテーマをめぐるでも、日米のズレが生じた。

2章にみたように、1970年代北米における反捕鯨運動は、海洋哺乳類への素朴な愛護心と、エコロジー思想を取り込んだ対抗文化の合流を背景としているが、三浦淳が厳しく批判するように、強烈な白人中心主義を招き寄せていた。⁽¹⁸⁾ 鯨と人間の「対等な関係」を決定しているのは白人でありながら、その特権的視点は省みられず、日系人迫害などの差別的な言動へと発展していた。あたかもそれは、浜野が失望した「白いアメリカ」を象徴するかのような主張だったのだ。

日本メンバーは、「関心すらもったことのないことがら」について、極めて窮屈な立場を引き受けていた。捕鯨国日本で反捕鯨を訴えるイベントを日本人が主催する。「好みのミュージシャン達」に引き寄せられた彼らは、はからずも日米摩擦の火種となる社会問題の当事者となっていた。

しかし逆説的ではあるが、その困難な状況が主体的な活動の余地を与えた。イベント運営は米側が主導する構図で決定的となったが、テーマに関しては、反捕鯨一色とならないよう日本側が積極的に介入し、新たな展開を生み出していくのである。

まず彼らが提起したのは、「対話の場」をつくることだった。例えば岩永は、アメリカ三都市で記者会見に登壇した際、反捕鯨運動の独善性を批判し地球環境をめぐる国際交流の必要性を訴えたという。⁽¹⁹⁾ 日本側は、反捕鯨の呼びかけを前提としたイベントでありながら、その主張に必ずしも与しないという自らの立場をイベントの内部に組み込んでいった。

そのことは米側の姿勢にも影響を与えた。アメリカにおける反日感情を食い止めることが目的として設定されたのだ。

1972年IWCの商業捕鯨停止勧告以降、アメリカでは漁を継続する日本への反発が高まり、日本製商品の不買運動が生じていた。このボイコットはグリーンピースを含む総勢17組織が参加する大規模なものであり、さらには日系アメリカ人や在米日本人への差別行動に発展し

た。後にオフエルドマンは、「ボイコット・ジャパン」の阻止が、RCRの重要な目的だったと語っているが、⁽²⁰⁾ 実際彼は、強硬派のグリーンピースと袂を分かち一方、迫害行動に頭を抱える「日系アメリカ人市民同盟」からの支援を取り付けていた。米側の運動家のなかには、日本側との接触によって、攻撃的手段ではなく対話路線の少数派に身を置く、すなわち、反捕鯨運動の主流から離脱する道を選択するものもいた。結果、RCRは、反捕鯨運動のなかにその「被害者」を動員する重層的な状況を作り出していた。

さらに日本側が要求したのは、テーマの変更だった。最終的には、鯨の保護を「突破口」に海洋環境全体を考えるイベントとすることで了解され、次の趣意が公表された。

人間がお互いに相手を尊重し、平等であるという確認をもつこと

人間以外の生物に対しても、生命体としての存在理由があることを認めること

これら生物が生きている基盤（地球・宇宙）を、人間だけの都合で変更しないこと

以上のことをふまえて、人間のための運動として「The Seas Must Live」を提唱して四月のイベントを行なう。⁽²¹⁾

もちろんテーマを鯨から海洋環境の保護へと拡張しただけであれば批判を免れるための方便にすぎないが、日本側は「The Seas Must Live」を具体的な形で提示するために、捕鯨問題とは文脈を異にする新たな課題をイベントに追加していくのである。

そのことがわかるのが、本会場とは別に設置された南館のイベントである。公害問題をテーマとし、水俣に関するフィルム上映、ポスター展示、自然食の物販などで構成されたこの会場は、佐々島宏ら20人あまりのスタッフが、複数の反公害運動組織の協力を得て制作した。

日本メンバーは、捕鯨問題と同様公害問題に対しても「素人」同然だった。公害は、実行委員会のなかでの米側との交渉のなかで獲得された課題だった。つまり、「好みのミュージシャン」から反捕鯨運動に動員された彼らは、その運動の渦中で、反・反捕鯨の立場を自覚し、海洋環境保護という共通の地平を形成し、米側の鯨に応答する日本側の問題として公害に接近していったのである。

当初の目的から逸脱したこの取り組みは、特定の主張を伝達するための政治集会や、利益の追求を前提とする

興行からみれば、徒労としかいいようがない。しかし後付けでいうならば、アルベルト・メルッチの「新しい社会運動」論に符号するものである。

メルッチは、ポスト産業社会における社会運動は特定の目的を達成するための道具的手段ではなく、その参加や行為自体が、自己の問題意識や他者との関係性を構築する新たな経験であるために目的化されると論じた⁽²²⁾。この議論に引きつけると、もともとRCRは捕鯨阻止という目的的手段として構想されたが、イベント成立に向けた日本メンバーの動員によって、「新しい社会運動」を表出する場に転化していた。準備過程で獲得された日本側の問題意識が即座にイベントに反映されることで、反捕鯨運動の「被害者」たる日系人コミュニティや、もともと無関連な公害運動をまきこむ「新しい社会運動」の動態として提示されたのである。

3-4 「エンカウンター」から新たな運動の展望へ

効率的な目的遂行よりも対話と学習が重視され、趣旨や編成が次々と修正されたことは、準備の混乱に拍車をかけ、集客にも影響を及ぼしたと思われる。実際、興行的な「失敗」は明らかだった。来場者は15000人程度にとどまり、当初の10万人の見込みを大幅に下回った。その敗因の一つが、チケット販売の遅れをはじめとする、実行委員会の不手際にあったのは間違いない。

しかしイベント終了後の発言を見る限り、日本メンバーは、その「失敗」を必ずしも悲観したわけではなかった。

岩永正敏：コンサートで海とかクジラとか言ってるけどあれは何なんだ、というような、最初はそんなものなんじゃないかな、とほくも思いますね。伊藤くんがいったみたいに、大事なのは続けることなんですね。

伊藤明男：ええ、続けます。こういう問題は、永遠に答えは出ないわけですね。結局は個人個人の自覚ってことしかないわけだから、それをどういう形でアピールして行けるかということで、続けてやることが大事だなという気がします。

八木康夫：そうですね。出来る部分でつながって行きたいし、どんどん広げて行かなくちゃいけないと思います。いままでの運動って⁽²³⁾いうのはどうしても内にとじこもりがちだったと思うけど。

多くのものがRCRを出発点と位置づけ、活動を継続

する意思を語っていた。単発のイベントで終わらせるのではなく、なんらかの運動として発展させようと考えていたのだ。では一体彼らは何を「続けてやって行」こうとしたのか。岩永は次のように述べている。

これからはシロウトが自分の知っている限りの範囲で動く、みたいなことが大切なんじゃないかと思いますね。ひとりひとりが被害者でありまた加害者だということ言えば、動く理由はあるはずなんです。ほくたちもこのコンサート・コミッティが始まるまでは互いにあんまり知らなかったんですけど、だいたい50人くらいの、それまで関係なしに動いていた人たちが、こういう機会に集まれたというのは、ほくたちにとってとてもおもしろい経験だったと思うんですね。別にほくたちはベネフィット・コンサートのプロになるんじゃないくて、もっといろんな人がいろんなところで、いろんなスタイルでやればいいし、そのときにほくらが手伝えることっていうのはいっぱいあると思うんです。そういうことを、失敗しながらでもやって行くことが大切なんじゃないかと思いますね。⁽²⁴⁾

ここで岩永が見据えるのは、環境保護運動を続行することでも、「コンサートのプロになる」ことでもない。「シロウトが自分の知っている限りの範囲で動」き、「それまで関係なしに動いていた人たちが」結びつく。必ずしも目的を共有しない「シロウト」が偶発的に接続していく、開かれたネットワークづくりというべきものである。日本メンバーにとってRCRを通じた反捕鯨ネットワークとの邂逅は、その主張自体に同意できないにせよ、むしろ、同意できないからこそ、自己の問題意識を醸成し、さらなる出会いを生成する、「エンカウンター」のための運動として経験されたのである。

いいかえれば、実行委員会の日米関係は、「ウッドストック・ネイション」の幻想を打ち砕いただけではなかった。「白いアメリカ」との接触によって日本側が模索したのは、立場の相違を確認しつつ再帰的にネットワークを拡張させていく、「ウッドストック・インターナショナル」の連帯のあり方だったのである。

では、RCRが引き出したその運動の可能性は、続く80年代にいかに継承されたのか。もしくは「ヒップキャピタリズム」の趨勢のなかで雲散したのだろうか。その検討は今後の課題としたい。

4 結

本稿はRCRの成立過程を検証し、対抗文化的連帯にもとづくフェスティバルが、「反現実」的な「物語」に回収されるものではなく、むしろ異なる立場を背負った主体が重層的に現れ接触する場を実現していたことを明らかにした。

RCRの母体となったのは、フォーク／ロック系のミュージシャンが関与する反捕鯨運動だった。アメリカにおける対抗文化は、「政治の季節」の終焉とともに消滅したのではなく、個別の問題系をめぐって継続され、より巨大かつ柔軟な組織体系を構築していた。米側にとってのRCRは、海洋哺乳類保護運動のネットワークを結集した大イベントだった。一方日本側は、独立系の音楽事業者を中心に構成された。「ウッドストック・ネイション」の「物語」に誘引され反捕鯨運動へと動員された彼らは、しかしその渦中で、反捕鯨には与しない日本の立場を獲得し、対話を模索していく。結果、このフェスティバルは、もともと無関連な反公害運動組織や、反捕鯨運動の「被害者」たる日系アメリカ人コミュニティをも巻き込む動態となった。

そのような矛盾含みの「エンカウンター」は、少なくともイベント終了直後においては、新たな運動の可能性として捉えられていた。複数の主体が偶発的に出会い、それぞれのアイデンティティを再構成するべく対話を行うこと。これが、RCRに賭けられた「夢」や「理想」だったといえよう。

仮にその試行錯誤が、「音楽を楽しむ」ことからかけ離れた徒勞と映るのであれば、それは、こんにちの「フェス」ないしロック音楽に期待される社会性が、当時のそれから大きく変質したからにはかならない。今後フェス史研究に求められるのは、興行的に確立した「ライブエンタテインメント」から過去を照射するのではなく、それとは異なる目的で存在したかもしれないフェスティバルのあり方を綿密に検証することではないか。取りも直さずその作業は、「ウッドストック・ネイション」がもたらした「現実」を見直すことにも繋がるはずである。

【資料】

「ローリング・ココナッツ・レビュー・ジャパン」概要

場所：東京国際見本市会場（晴海東館ドーム）

日時：1977年4月8日～10日 チケット価格：3000円

〈出演者〉

4月8日：泉谷しげる、Ric O'Feldman／Bob Ingram & The Dolphin Project Band／Estrella／Odetta／Eric Andersen／Richie Havens／岡林信康／泉谷しげる&ストリート・ファイティング・メン feat.Char／John Sebastian／Fred Neil

4月9日：Terry Reid／Warren Zevon／Danny O'Kefe／イルカ／J.D Souther／Jackson Browne

4月10日 モーニング・ショウ：中川五郎／豊田勇造／Mimi Fariña／Country Joe McDonald／Terry Reid & David Lindley／南佳孝とブレッド&バター／Paul Winter Consort

4月10日 ファイナル・ショウ：宇井純、Peter Childs, Vince Martin & Terry Reid
ザ・ラストショウ／Steve Gillette／Peter Rowan Band／John Sebastian／Louisiana Red／久保田麻琴と夕焼け楽団、細野晴臣／上田正樹とセッションバンド／Lonnie Mack／Stuff

注

- (1) Abbie Hoffman, *Woodstock Nation: A Talk-Rock Book* (Random House, 1969).
- (2) 前者の例として、室矢憲治『'67～'69ロックとカウンターカルチャー激動の3年間：サマー・オブ・ラブからウッドストックまで』(河出書房新社, 2017年)。後者の例として、Joseph Heath and Andrew Potter, *The Rebel Sell Why: The Culture Can't Be Jammed* (Harper Collins, 2004)。＝栗原百代訳『反逆の精神 カウンターカルチャーはいかにして消費文化担ったのか』(NTT出版, 2014年)。
- (3) Michael J. Kramer, *The Republic of Rock: Music and Citizenship in the Sixties Counter Culture* (Oxford University, 2013), 25.
- (4) Kramer, *The Republic of Rock*, 220.
- (5) 永井純一『ロックフェスの社会学 個人社会における祝祭をめぐって』(ミネルヴァ書房, 2013年), 29頁。
- (6) 浜野喬士『エコ・テロリズム——過激化する環境運動とアメリカの内なるテロ』(洋泉社, 2009年), 34頁。
- (7) Frank Zelko, *Make It a Green Peace!: The Rise of Countercultural Environmentalism*, (Oxford University Press, 2013).
- (8) Zelko, *Make It a Green Peace*, 72.
- (9) Robert Hunter, *Warriors of the Rainbow* (Henry Holt & Company, 1979)。＝瀧脇耕一訳『虹の戦士たち』(社会思想社1988年)。

- (10) 海洋哺乳類に対する国民的愛護心は政府の国際政治上の戦略にも利用された。アメリカ連邦政府は、1972年ストックホルムでの国際連合人間環境会議において、クジラ絶滅の危機を主張し、商業捕鯨停止勧告を採択させている。当初この会議では、ベトナム戦争での枯葉剤使用が論点となる予定だったが、それを押し切る形で、米国がテーマを切り替えたといわれている。
- (11) オバリーに関する記述は、彼の自伝Richard O'Barry, and Keith Coulbourn, *Behind the Dolphin Smile* (Algonquin Books, 1988). = 夏川道子, 糸長光子訳, 野崎友璃香監修『イルカがほほ笑む日』(TBSブリタニカ, 1994年)を参考に行っている。
- (12) Todd Gitlin, *The Sixties: Years of Hope, Days of Rage* (Bantam Books, 1987). = 疋田三良, 向井俊二訳『60年代アメリカ 希望と怒りの日々』(彩流社, 1993年)。
- (13) The Express, 2, December 1976, 12, <https://cdnc.ucr.edu/cgi-bin/cdnc?a=d&d=EXP19761202.1.12&srpos=1&e=-----en--20--1--txt-txIN-%252522rolling+coconut%252522-----1>. (2019年12月27日閲覧)
- (14) 岩永正敏『輸入レコード商売往来』(晶文社, 1982年)。『宝島』1977年7月号～9月号「鬼ごっこはまだまだ続くよ」。
- (15) 『宝島』1977年7月号「鬼ごっこはまだまだ続くよ」, 78頁。
- (16) 『宝島』1977年3月号「土曜の夜にローリングした」, 78～79頁。
- (17) 『ニュー・ミュージック・マガジン』1977年7月号「難破船ローリング・ココナッツの顛末」, 72頁。
- (18) 三浦淳『鯨とイルカの文化政治学』(洋泉社, 2009年)。
- (19) 岩永『輸入レコード商売往来』, 87頁。
- (20) Ric O'barry, "Save the Dolphins: Boycott Japan?", *Dolphin Project*, <https://www.dolphinproject.com/blog/save-the-dolphins-boycott-japan/>. (2019年12月28日閲覧)
- Stack Jones, "Everything Starts with a Dream: An Interview with Ric O'Barry", *Earth Island Journal*, https://www.earthisland.org/journal/index.php/articles/entry/everything_starts_with_a_dream_an_interview_with_ric_obarry/. (2019年12月28日閲覧)
- (21) 岩永『輸入レコード商売往来』, 89頁。
- (22) Alberto Melucci, *Nomads of the Present Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, edited by John Keane and Paul Miler (Temple University Press, 1989). = 山之内靖訳『現代に生きるノマド 新しい公共空間の創出に向けて』(岩波新書, 1997年)。
- (23) 『ニュー・ミュージック・マガジン』1977年6月号「つらかったけどやってよかった, この大イベント」, 73頁。
- (24) 『ニュー・ミュージック・マガジン』1977年6月号「つらかったけどやってよかった, この大イベント」, 73頁。
- (おおしま てつ)